

「死ぬ時に思い出さない今日という一日」

関戸哲也

どこかのオフィスビルの屋上。

お昼頃。

舞台下手の奥に休憩する為のベンチがある。

男が片手にサンドイッチを持っていて

女の方が小さいお弁当箱と箸を持ったまま、舞台前に来て何かをじっと見て いる。

「えーと・・・だから、ちょっとよく分からないんですけど」

「だからあそこなのに」

「どこなんですか」

「あそこ。茶色いののちょっとこっち」

「ちょっとこっち?・・・ああ、あのプロミスの看板の?」

「そっち右じゃないですか。こっちこっち」

「あ、そこの尖ったビルの」

「それ行き過ぎです。こっち・・・」

「どこ?」

「もうあそこ! (指を差す)」

「(その指を辿ってみて) あそこ? 「高橋商事」 って書いてある? ビル?」

「違つ! .. それ奥だから! ええと。あそこ・・・あそここのピンあるでしょ?」

「ピン? ピンってなんですか?」

「ピンですよ。あのピンからずつとこうやつて来たところ・・・」

「あ、ピンってあそこの「ラウンド1」?」

「そうですそうです」

「「ラウンド1」 って言つてくださいよ」

「わかるかと思つて」

「そういう目印先に言つてください」

「だから、そのピンを」

「つてかあつちだつたら全然違う方向じゃないですか」

「まずはそつから、そつからこう、ずっと右に来ると・・・」

「ああ・・・あそこ? .. あのビル? ああ。灰色の? 20階建てぐらいのビル?」

「そうですそうです。特徴無いから説明の仕方が難しくて」

「(良く見て) えー?」

「ね・・・」

「(見つけて) あー・・・」

「ね・・・」

「あ、あれ・・・」

男女

男 「それは教えてくれたってことでしよう？」

女 「全然違いますよ。返答っていうのは受動的で、教えるっていうのは能動的な行為でしょう？そこにはこれぐらいの差が・・・」

男 「いや、そんなんどうでも。あの、なんとかしましょうよ」「どうするんですか」

男 「（色々考えてみるも）どうしよう」

と、女、弁当を食べ始める。

男 「ちょっとお弁当食べるのやめましょうよ」

女 「ボヤボヤしてる間に休憩時間終わっちゃうから」

男 「そんな・・・・警察に連絡を・・・（ケータイを取り出して）あれ？嘘でしょう？こんな時に！充電・・・！」

女 「（手で男のことを指して）あのー、たまにほら、この屋上でお会いするじゃないですか。でも、お話しするのは初めてだから。人って何を契機に話すようになるか分からないもんですね。そんな声されてたんですね」

男 「（遮つて）そっちのどうですか？そっちのケータイ！」

男 「あ、ケータイ持っていないんです」

男 「そうなの？」

男 「ええ・・・」

「珍しいですね。今どき」

女 「（ちょっとはにかんで）いや、あたしつて嫌になるくらい普通なんです」

男 「（聞いておらず）ちょ、どうしよう！電話！」

「大丈夫ですよ」

男 「何が大丈夫なんですか」

「きっと他に気づいてる人いますって。そんでその人達が連絡してくれますって」

「でも・・・・でも、今まさに飛び降りでもしたらどうするんですか？」

「それは・・・ま、残念だなーって」

男、出て行こうと。

男 「どこに行くんですか？」

「止めに行かないと」

「え？」

「行くんですよ。向こうのビルまで」

「え？あのピンのところの右でしょう？結構かかるんじゃないですか」

男 「え？」

女 「時間。こつから見ると近いように感じますけど、いざ歩いて行こうとすると相当かかるもんなんですよ。駅から「ヨシヅヤ」見えて直ぐじやんって思つても、いざ歩くと20分ぐらい。きっと向かってる間に落ちて終わりだと思いますよ」

男 「ちょっとそんな言い方！」

女 「あなたアレでしょ？（やつてみて）「早まるなっ！」つてやりたいわけでしょ？屋上のドア勢いよくバンつて開けて、ヒーローみたいに登場したいわけでしょ。でも、屋上のドア開けたらおそらく早まつちやつた後ですよ。あなたは無人の屋上に「早まるなっ！」つてヒーローみたいに登場することになるんですよ？」

男 「（ちょっと考えて戻つてきて、大声で）おおい———っ！止めろ——つ！」

男 「（お弁当食べながら）あー届かないですね」

男 「（もう一度大声で）お———いっ！」

女 「こつち振り向きもしないもん」

女 「（女に）死ぬなつてどうやつてゼスチャ一すれば良いんだろう」「え？」

男 「死ぬなつてゼスチャ一」「え？」

女 「（ゴボウを食べながら）さあ」

男 「（ビルに向かつて、首吊る感じでやつてみて）死ぬな——つ！」

女 「それはもう首吊っちゃつてんじやん」

男 「（首吊つてその後バッテン作つてみて）死ぬな——つ！」

女 「それはなんか変身する感じになつてますよ」

男 「ちよつとあんたさつきからうるさいよ！」

女 「アドバイスをしてるだけじゃないですか（男の動きを真似して）だつてこれは完全になんか変身するポーズでしょ？それ見て人は「ああ自殺止めてるんだ」とは思わないですよ。特に自殺しようとしてる当人はね」

男 「…………（大声で）おお———いっ！……全然見ないな（大きく手を振る）」

女 「（お弁当食べながら）あの、やめてもらえません？」

男 「何が……」

女 「万が一、あの子がこつち見たらどうするんですか」

男 「いや、なんで？僕らが見てるつてことを知つたら思いとどまるかも知れないじゃないですか」

女 「いや、もしひに私たちを見つけて、その後飛んだらですよ、あの子がこの世の最後に見るのが私たちつてことになるじゃないですか」

男 「いや、そんなことさせない為にも……」

女 「でも、そういう可能性もあるわけでしょう？あの子がこの世の最後に見るのが私たちって可能性もあるわけでしょう？」

「いや、そりや、ま、可能性としてはね」
「それ、ちょっと耐えられないみたいな」

「は？」

「ちょっとそれは違うくないですか。なんかそれは重すぎません?」
「何が違うんですか!何が重いんですか?あなたね、え?ちょっと待って。助けたいつて思つてないんですか」

「いや、思つてますよ。そりや思つてますけどね」
「やっぱ変わつてますよね」

「いや、だから嫌になるくらい普通なんですよ」

「変わつてますよ。さつきからずつと平気でごぼう食べてるし!」
「何回言つたら分かるの!だから、お昼終わつちやうんだつて!」

「人が死のうとしてる時にゴボウは食べるな!」

「なんですか!そのイチャモンは!」

「人が死ぬつてことの莊厳さと、ゴボウが持つその所帯染みた感じが似合わないつて言つてるんですよ」

「まあ、頑張つて助けられるなら助けたいですけど、でも、でも、人の最後の・・・なんかそういう深いとこに関わるみたいなのはやつぱ。夜寝る時に思い出すじやないですか。彼女の最後の眼差しみたいなもの?それは違うでしよう?」

「違わないよ!グズグズしてると本当に飛び降りちゃうから・・・」

「もう良くないですか?飛び降りたいつて言つてるものは・・・」

「は?」

「飛び降りたいつて言つてるものを無理に止めようとするから歪みが出てくるんですよ。良いじゃないですか。飛び降りたいつて言つてるんだから」

「彼女はまだ学生なんだ」

「・・・・・」

「そうでしょ?制服着てるんだから・・・。彼女のこれからには輝かしい未来が待つてるんだ。だから、そんなことさせちゃダメなんです」

「・・・そんなこと言つたら例え私が学生の時に飛び降りても、今飛び降りても何の違いもないかも分からないです」

「は?」

「人生なんてそんなものかも。少なくとも私の人生は」
「何を言つてるんです」

「あのね、こう思つたことありません?今日つていう日は死ぬ時に思い出す1日なんだろうかつて」

「は?死ぬ時に?」

「ええ・・・。本当に何でもなく過ごしてしまつた日の終わりに、今日つて日は死ぬ時

には思い出さない日なのかも知れないって思ったことないですか。つてことはですよ、それはそんな日は無いってのと変わらないってことなんじゃないですか・・・」

「そんな日ばかりでもないでしよう」

「そんな日ばかりですよ。私はね！」

「・・・」

女 「そんな日ばかりです。会社とウチの往復だけで、家に帰つたらテレビ見て、休みなんか一日中部屋にこもつて、そうやって、何十年生きてきました。生きてくつてことは私にとつてそういうことです」

男 「でもいつもと違う日だってあるでしょう」

女 「無いんです。ずっと同じなんです。お昼だつていつもここに。事務所でおばさん達と居ると息が詰まるから・・・そしていつものお弁当を・・・。お弁当の中身も一緒なんです。自分で煮付けてきたゴボウです」

男 「いや、それはあなたの生き方であつて、あの子とあなたは違うじゃないですか」

女 「そんな違わないんじゃないですか。わたしもあるの子も・・・」

「・・・」

「あなただけってそういうでしよう?」

男 「何で僕の話になるんですか」

女 「こんな寂しい屋上にたつた一人でサンドイッチ食べに来てるって」

男 「僕のことは良いでしよう」

女 「ここでよくお会いするじゃないですか。その度に思つてたんです。ああ・・・この人も会社にいられないんだろうなって」

男 「僕は違うんですよ。あなたと違つてこれでも人生充実してるんだ」

女 「どう充実してるんですか」

男 「何でこんな話になつてるんだよ。僕は（向こうのビルを見て）彼女を助けたいんですよ!」

「あなた充実はしてないですよ」

「何で分かるんですか」

「頭だつてアメリカンになつてるわけだし」

「はい?・・・何ですかアメリカンって」

「だからアメリカン」

「なにそれ」

「届かないかな」

「何のこと。アメリカ人ってこと?」

「違う。ブレンドに対してのアメリカン」

「何のこと?はつきり言つてよ」

「だからよく知りもしない人に「頭薄い」なんていうのは失礼でしょう?だから「頭が

「アメリカン」って言つてあげてるんですけど

「ハッキリ言いすぎだよ！」

「だからなるべく傷つかなくて済むように、お茶目に言い換えてあげてるんでしょう？」

「それはあなたが男だったら殴りかかるレベルで失礼ですよ」

「優しさですよ」

「どこがだよ」

「頭アメリカンのくせに人生が充実してる訳がないんですよ」

「やめろ！ちょ、なんでこんな話をしてるんですか！？今話してるのは彼女のこと

で・・・（見てみて）あれ？いない

「は？」

「彼女、いなくないですか」

「え？」

「ホラ、あなたと変な話してるばっかりに！」

「・・・・それはそれでしようがないじゃないですか」

「しようがなくないよ！ああもう、あなたと話す代わりにどつかで電話借りりや良かつたんだ」

「間に合わなかつたですって・・・」

「・・・・なんてことだ。知らないウチに飛び降りて」

「うん。ま、可哀想ですけどね（ゴボウを食べる）」

「ゴボウを食べるなーっ！」

「本当にいないんですか？」

「だつて、いないですよ！ホラ！」

男、改めてビルを見て。

「（見てみて）あれ？・・・・あれ？どこだつたつけ？」

「さつき教えてあげたじやないですか」

「あれ？どれだ？」

女、近づいてきて

「だから、あそこの・・・・あれ？どこだつたつけ？」

「プロミスからこう来るところでしよう？」

「違う違う茶色のこっち」

「こっちでしよう？」

「違う違うそれだと尖った方に行っちゃうでしょう」

「え? 分からないって」

「なんの特徴もないビルだから。だから一旦こっちのピンにね」

「ああ! もうこのやり取りが鬱陶しい! もうピン良いよ!」

「その方が分かり易いんですって! あれ? え? いるじゃないですか」

「え?」

「ホラ、あそこあそこ・・・」

「どこ?」

「だからピンから右にずっとこう来ると・・・」

「え? もうなに? 同じようなビルばかりで」

「ピンからこう平行です。こう平行ピンから」

「ピンって他に言いようないんですか。あ・・・」

「ホラ・・・まだいますよ」

「ああ・・・」

「もうビックリさせないでくださいよ」

「・・・・・・・・」

女、お弁当を食べる為に後ろのベンチへ戻つて。

「どうしたんですか。呼ばないんですか?」

「・・・・・・・」

「さっきまであんなにハシャいでたのに」

「ハシャいでたって言い方やめてもらえますか」

「どうしたんです?」

「いや、同じようなビルばかりだなって思つて

「え?」

男 「同じようなビルばかりなんですよね。こつからこうしてみると。どのビルがどれか見分けもつかない・・・。人もそうなんですかね。違つてるようで、実は全然変わらないのかも知れない」

女 「だから言つてるんじゃないですか。あなたも一緒にですよ。そんな頭しといて人生充実してゐるわけないって」

男 「頭は関係ないでしよう?」

女 「充実はしていないでしよう。充実してたら一人でこんなところに居ないでしよう」

男 「それは、あなただけってそうでしよう? ! 会社嫌で、仕事嫌でここに逃げて來てるわけでしょう? !」

女 「わたしは逃げるわけじゃないですから!」

「俺は逃げたいよ!」

女 「は？」

男 「逃げられるんだつたら逃げたいよ！俺が昼休憩終わりでなにやるか分かりますか？コンビニ回るんですよ！？旅行代理店なのに！」

女 「なんですかそれ」

男 「ま、元々やる気も無かつたんですけど、ミスで大きな取引先を失つてからの仕事がね。会社のパンフを、ホラ駅やコンビニにあるじゃないですか。旅行会社のパンフ。それを1日かけて補充と整理するんです。そんなん仕事つて言えないのでしょう。そんな仕事しながら、年下の上司と笑いながら飯食えないでしょう！？」

女 「はあ……」

男 「同じなんですかね。私もあなたもあの子も、同じようなところにいるんですかね」「…………あの……そこ同じにしないでもらいます？」

女 「はあ！？」

男 「わたしは好きで一人でここに来てるんです！変に誰かに邪魔されたくないので、死ぬ時に思い出しもしない1日を死ぬまで一人で積み重ねていけるように……それだけです！わたしの人生はそれで良いんです」

男 「…………あの」

女 「はい？」

男 「あなた、あの子の事、こつからじや助けようがないから助けないって言ってましたよね」

女 「はあ」

男 「もしですよ。わたしがここから飛び降りようとしたらどうしますか」

女 「え？」

男 「助けますか？わたしのこと？」

女 「何言ってるんです」

男 「それとも、無いのと同じ日を過ごしてると止めたりはしませんか」

女 「それは……」

男 「その通りなんですよ。わたしもこの先、死ぬ時に思い出す1日が無いんだと思います。きっとそうなんだ。だったら、今でも後でも変わらないんだつたら……。今でも……」

女 「…………」

男 「止めますか？止めてくれますか、わたしのこと」

女 「…………（ニヤニヤしながら） もちろんです」

「え？」

「（ニヤニヤしながら） それは止めなきやいけないでしょ？」

「ちょっと、何をニヤニヤしてるんですか」

「いや、その……や、あの……私、なんかそういう場に出くわした事がなくてです

ね、その、そういう時、どんな立ち振る舞いをしたらいいか分からないみたいな……」

「あの・・・冗談だつて思つてるんですか？」

「いや、そんな風には思つてないですけど」

「じゃ、止めてみてください」

「・・・え？」

男　女　男　女　男　女
「心から、わたしを止めてみてください。ニヤニヤしてないでさ！あなたの本気見せて
みてください！」

男、フェンスを越え屋上のヘリのところに行く。

「(笑いながら) やめろ～」

「・・・」

「(笑いながら) やめろ～。早まるな～！」

「・・・」

女　男　女　男　女　男　女
「(笑いながら) まだ人生は終わっちゃいないから・・・(いきなりやめて) ごめんなさい
無理だあたし・・・(ゴボウを食べ始める)」

男　「何ですか！」

男　女　男　女　男　女
「こんな状況笑わずにいられないですよ。だって、ええ？なにわたしの猿芝居」

男　女　男　女　男　女
「あの、わたし本気なんですけど！」

女　「わたしだって本気ですよ。本気で笑っちゃうから(笑いが止まらないままゴボウを食べ始める)」

男　「何ですか！」

男　「だからゴボウ食うなよ！本気なんだって。本気で飛び降りようとしてるんだって！あの子だつて自分の人生を哲学的に考えてああなつてんだから」

女　「あの子・・・ああ・・・あなた、あの子と一緒だつて言いたいんですか」

男　女　男　女　男　女
「わたしとあの子はそういう哲学的な深い部分で繋がつてているんだ」

「繋がつてはいないと思いませんけど」

男　女　男　女　男　女
「本当に落ちますよわたし！あの子と一緒に！もう良いんだ！わたしの人生なんか！」

「あの」

「なんですか」

「もう止めたりはしないんでワングクッシュョン挟んで良いですか？」

「ワングクッシュョン？」

「今から下行つて人呼んできますから、その人と喋つてから飛び降りてもらえません？」

「はあっ！？」

女　男　女　男　女　男　女
「だからあなたの人生で最後に喋ったのがわたしって、それは違うじゃないですか。ここにごぼう食べに来る時でも思い出しちゃうじゃないですか。それは違いません？」

「何言つてるんだ！」

「至極真っ当なことを言つてるつもりですけど」

男 「落ちるぞ！」

女 「ワングッシュヨン！」

男 「なんだよワングッシュヨンって！」

女 「（女ビルの方を見て）あつ…………！」

男 「（その声びっくりして落ちそうになつて）うわあああ……っ！あぶねーっ！あつぶねーっ！なんだよ？！」

女 「あそこ……あのビル！」

男 「なに？」

女 「男の人が……スーパーイヤ人みたいな金髪の頭の……」

男 「男？（改めてビルの方を見て）ほんとだ。あれも制服？」

女 「遠くからだと見えづらいんですけど、制服っぽいですね」

男 「高校生かな。うわあ、遠いのに本当にスーパーイヤ人みたいな頭してる」

女 「きっと近くで見たらスーパーイヤ人ですね」

男 「つまらないこと言わなくて良いから」

女 「あんな髪型うらやましいですか？」

男 「ちよつと黙つて！」

女 「あれ？ズカズカ近づいてつてますけど」

男 「ちよ……ダメだよそんな風に近づいていつちやあ。万ーのことがあつたら……おいおいダメだよ！不良！そんな風に近づいちや！そういう子はちゃんと繊細に扱わないと…………あつ！」

女 「あつ！」

かなり長い間。

「・・・・・あれ……」

「チューしてますね」

「チューですね」

「チューな」

「チュー」

「男に呼ばれた途端、柵またいで戻つていつて。あれ、チューだと思います」

「え？チュー？」

「チューです。チュー以外ないですよね」

「お……ん？お？ん？つて……えつと……え？あれはつまり？」

「まあ、高校生が別れ話かなんかで揉めてたんですかね」

「どうなんですか」

「だってホラ……。嬉しそうに出て行きますよ。腕組んで」

「だつてホラ……。嬉しそうに出て行きますよ。腕組んで」

男 「ああ・・・」

女 「だから、アレじゃないですか？「死んでやる」かなんか女の子がラインかなんかで言って、それを受けた男の子がやつて来たってことですかね」

男 「それは・・・その終電近くの改札でよく見るみたいな」

男 「なんで泣いてるか分からない女の子と、それを黙つて見てる男みたいな」

「そんな感じってこと？」

「きっとこの後、あそこのラウンド1あたりに行くんじゃないですか？」

「ラウンド1」

「ええ・・・ラウンド1には、そんなやつらがわんさかいます。ラウンド1はそんなバカモノどもの吹き溜りです」

男 「・・・哲学的に繋がつて・・・」

「こっちが慌てる必要なかつたですね」

「・・・」

「どうしますか？」

「え? どうしますって何が?」

「いや、うん。その、本気って仰つてたから」

「・・・」

「あ、本気じゃなかつたですか」

「・・・」

「あの、昼休憩もそろそろ終わるんですけど」

「・・・」

「そこにいたら、私たちみたいに誰かがあなたのことを見つけてくれるかも知れません

男 「・・・・・(フェンスをまたいで急いでこっちにくる)」

男、「ぐつたりと腰を下ろす。はあはあと肩で息をしている。

女 「もしかしたら今日は死ぬ時に思い出す1日になるかと思ったんですけど、やっぱそうでもないみたいですね・・・良かつたですね」

男 「何がですか?」

女 「ひとまず死ななかつたから・・・(考えて) ん? 良かつたのかな?」

と、女のケータイに着信が入る。

男 「え?」
「(電話に) ああ。分かりました。すぐに降りますので(切る) 呼ばれちゃいました。

「え?」

「(電話に) ああ。分かりました。すぐに降りますので(切る) 呼ばれちゃいました。

もうお昼過ぎちゃってますね」

「え？・・・・」

「は？」

「いや、だってケータイ・・・持つてないって・・・・」

女 「会社用のケータイしか持つてないって意味です。面倒なことになると嫌だなって思つて」

男 「・・・・・」

女 「（男のサンドイッチに目をやつて）それ食べないと。昼からもまたコンビニ行かないといけないんでしょう？こんなところにずっといると熱中症になっちゃいますよ。やっぱ暑いわ（行こうとする）」

男 「あの！」

「はい？」

「これから仕事戻らずにどつか行きません？」

「え？」

男 「どこでも良いんです。そうだ、ラウンド1に遊び行きません？」

「その」

「はい？」

「面倒くさい事になりませんか？」

男 「・・・なるかも知れないですけど、死ぬ時に、思い出す1日にはなるかも知れません」

女 、ちょっと笑ったような。

音楽が高らかに鳴り響いて。
溶暗。